

第六編 近・現代

第一章 近・現代概説

豊津藩の成立

小倉藩は明治二年（一八六九）十一月、藩庁を田川郡香春から仲津郡錦原に移した。地名も豊津と改めて豊津藩が成立した。豊津は、古代の都・豊前国府の所在地から、再び豊前の国の首都になったのである。

藩庁や会計局、民政局、営繕局、市政局、社寺局などは、現在の町役場一带に新設された。藩士もその周辺に居住することとなり、武家屋敷が各地に建った。本町、錦町は一丁目から八丁目まで町割りされて商家が軒を並べた。

豊津藩の成立に伴って、藩校育徳館も明治三年正月に開校、同年十月には分校として大橋洋学校（現行橋市）も開設し、後にオランダ人教師カステールも雇用するなど教育に力を入れた。

豊津藩成立は、豊津の眼りを覚まさせ、豊津は一気に活気を呈した。

明治四年七月十四日、廃藩置県によって、豊津藩は豊津県となるが、同年十一月十四日には、豊津県、千束県、日田県管轄下の企救郡、それに中津県の豊前一国が小倉県となり、県庁は豊津から小倉へ移動、小倉室町に新県庁が開設された。旧藩主 小笠原忠忱ただのぶは豊津を去り、豊津の政治的地位は低下した。

しかし、豊津藩の成立で多くの士族が豊津に移住した。明治五年二月の調査では、旧豊津村に一九三戸、七四八人、旧祓郷村に七〇戸、二五八人、旧節丸村に一四一戸、四四四人の合計四〇四戸、一四五〇人上っている。

近代化への道

廃藩置県のと、明治五年（一八七二）には、戸籍法の施行、学制の制定、太陽暦の採用、同六年には徴兵令、地租改正など、明治新政府によって次々に新制度がスタートした。

地方行政制度でも、豊前の国で江戸時代から長く続いた手永制度が明治五年に廃され、新しく大区・小区制が導入された。同年には、郵便制度も開始され、豊津には郵便取扱所も開設された。また、明治十二年には行警察署豊津分署が開設、同十九年には豊津警察署となる。明治二十三年、行军区裁判所豊津出張所開設など、京都郡・仲津郡の行政機関は、行事村と豊津村に設置され、豊津はこの地方の行政の中心地としての役割を果たした。

明治二十二年四月、市制町村制が公布され、豊津町域の一丸村の合併が行われ、豊津村、節丸村、祓郷村の三カ村となった。明治二十九年には、郡制改革で京都郡と仲津郡が合併して京都郡となる。また、昭和十八年四月には、豊津村と節丸村が合併して豊津村に、さらに、同三十年三月、豊津村と祓郷村の一部（章場、東徳永、袋迫を除く）が合併して、現在の豊津町が成立した。

交通・通信においては、明治二十八年八月十五日、行橋―伊田間に豊州鉄道が開通して豊津駅が開業した。豊州鉄道は明治三十四年に九州鉄道と合併、同四十年には国有化された。平成元年（一九八九）十月には筑豊平成鉄道となり翌二年に新豊津駅が開業した。大正十五年（一九二六）には、行橋から伊良原村帆柱まで

乗合自動車（バス）が運行された。また、豊津村に大正二年、萩郷村と節丸村に同六年、それぞれ電灯がともった。電話が開通したのは昭和三年（一九二八）のことだった。

文教のまち

豊津は、明治三年の豊津藩成立と同時に、藩校育徳館が開かれ、以来、文教のまちとしての性格も有した。藩校育徳館は、廃藩置県後、私立育徳学校と称して中等教育を続け、明治七年には第三十五番中学校、同十二年には県立豊津中学校、同二十年には豊津尋常中学校と幾度も校名を変えた。これは、明治初期、教育制度がまだはつきりと確立せず、県立校とは名ばかりで、学校経営は厳しいものであった。県立豊津中学校となり、経費の全額を県が負担するようになるのは明治三十四年のことだった。

この間、同八年から明治十二年まで四年余、第三十五番中学校内に小学校教員養成所が併設され、発足後間もない小学校教員の養成がなされた。また、明治十七年には、中学予備校の遂志校（同二十年には、育材校と改称）、翌十八年には陸軍士官学校予備校の立振校も開設された。これは、当時、福岡県下に中学校はわずかしかなく、中学校に入学できる人員が極めて少数だったので中学予備校が生まれたものであり、中学卒業後、軍人を志願し士官学校に進学を希望する者も多かったが、難関だったので、その予備校が出現したのであった。

明治末期には、京都郡立高等小学校、郡立農学校、さらに明治四十五年には郡立豊津実業女学校（のち豊津高等女学校となり、戦後は豊津高校に統合）も開かれた。

豊津中学校や予備校、女学校の生徒のうち、遠距離からの入学生徒は、寮や寄宿舎に入ったり、豊津の町家に下宿したりして、明治・大正・昭和戦前の豊津は、文教のまちとして若者で賑わった。

いっぽう、小学校の開校も早かった。明治五年の学制の公布で各地に続々と小学校が誕生したが、豊津では、藩校育徳館の影響もあって住民の向学心は強く、明治五年、旧藩庁内の一角に、裁錦小学校（現在の豊津小学校）が開校した。さらに、翌六年から七年にかけて、国作、彦徳、国分、皆見、光富、節丸の合計七小学校が開校。明治十九年までに、彦徳、豊津、有久、光富の四校に統合された。さらに同二十五年までに豊津、祓郷、節丸の三小学校に統合され、現在に至っている。

昭和二十二年には、新学制によって国分中学校（同二十七年、豊津中学校と改称）が開設された。

寺社の移転・建立

豊津藩の成立にかかわって明治期には、神社、寺院の移転・建立も相次いだ。錦町には、明治四年に宮地岳神社、同五年に説教場浄土寺、同七年に稲荷神社が、それぞれ小倉から移転・建立された。

明治五年には、八景山に招魂社（現八景山護国神社）が創建され、同年、さらに小笠原氏の祖霊を合祀して、磐根社と改称した。同十九年には、巢鳥に小笠原神社を建立、小笠原氏の祖霊を磐根社から分離して、この地に祀った。同二十年、日蓮宗本立寺が豊津に、同二十六年、浄土宗峯高寺が二月谷・壽町に、それぞれ移転、建立された。

また、豊前国分寺の三重塔は、明治十九年、第十九世の宮本孝梁師が、大塔建立を発願、同二十八年落成した。三重塔は昭和二十九年、落雷にあい傷んだので改修されたが、再び老朽化したため、全面解体復元工事を行い、工費一億六〇〇〇万円で同六十二年に竣工した。

産業の発展

明治四年の廃藩置県によって禄を失う者は豊津藩で三四〇〇余人にも達した。これらの旧武士は士族授産事業として、豊津の地を開墾し、紅茶製造や養蚕、製糸事業などに取り組んだが、いずれも長続きせず、明治末期にはほとんど廃業した。

大正時代に入って、豊津村耕地整理組合が組織された。この組合では、大正池を築造し、全長一・五キロメートルの導水路を造り、豊津村に六六町歩の水田を開くという大事業を完成し、豊津の農業は大きく発展した。

第二次世界大戦で敗北した日本では、農村の地主・小作の関係を無くし、健全な自作農をつくるための農地改革が実施され、農村の民主化が図られた。また、台ヶ原や二月谷で、開拓によって果樹園経営が行われ、二月谷や光富で梅栽培も始められた。

昭和二十三年、豊津・祓郷両村に農業協同組合が成立。同四十年には両組合が合併して、豊津町農業協同組合となった。

昭和四十三年からは農業生産基盤強化のための土地基盤整備事業に取り組み、全町で圃場は整備、農道、水路の整備、溜池の新設・改修などの整備がすすんだ。

昭和五十年代には、光富に、ゴルフ場・京都カントリー倶楽部が開設されたほか、錦陵工業株式会社、池田運輸株式会社が進出。株式会社深江工作所や株式会社柏木興産の工場も拡張・整備が行われ、工業生産力も高まった。

町勢の発展

昭和三十年三月一日、豊津村と祓郷村が合併し、新しい豊津町が誕生した。保育所や小・中学校施設の整備や公民館、各地区の学習供用施設の建設がすすみ、同四十六年には、町役場

庁舎も完成した。

昭和四十年代に入って、町内各地で住宅団地、分譲地の造成が行われ、住宅建設でベッドタウン化がすすんだ。昭和四十七年には、町のシンボルとして豊津町章を、同五十四年には町制二十五周年記念に公募して豊津音頭と町民の歌が、同六十年には、町の花、町の木にそれぞれ「梅」が制定された。

町の施設としては、上水道事業の開始（昭和五十八年）、BアンドG海洋センター（同五十九年）、商工業研修センター（平成元年）、町営総合運動場公認陸上競技場（平成二年）、歴史民俗資料館、とよつ歴史回廊の里整備事業（同六年）などが完成し、町勢は大きく発展している。